

今美術館に必要なこと 〈その一〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也



オディロン・ルドン
《グラン・ブーケ (大きな花束)》
1901年 パステル、カンヴァス
248.3×162.9cm

私の勤める三菱一号館美術館は、開館後4年余りを経て、お陰さまで内外からかなりの評価を得ることができたような気がしています。既に延べ120万人を超える方々が来館し、とりあえず一号館の催しなら信頼して何度もお越しになるというリピーターの方も多くなりました。まだ開始したばかりですが、「サポーター会員 (MSS)」の方も徐々に増えつつあります。

けれどもその一方、美術館の運営にまつわる色々なこともまた課題として浮かび上がってきました。そうしたもののなかには一号館美術館に固有の問題もあり、また日本や世界の美術館全般にかかわる事柄もあります。そうした話をこの場を借りてすこし書いてみたいと思います。

(1) 所蔵品 (コレクション) のこと

よく、海外の美術館と比べて日本の美術館はコレクションが少ない、と言われます。三菱一号館美術館には、トーゥールズ＝ロートレックのポスター・版画に関する重要な一括収集である「ジョワイヤン・コレクション」をはじめ、ルドンの巨大なパステル画《グラン・ブーケ》、ほぼ完璧なヴァロットンの版画コレクション、ジャポニスムの影響下に制作された陶磁器や銀器などのテーブル・ウェア類、非常に稀な版画集「レストンブ・オリジナル」の揃いなど、数はさほど多くないにしても、質の高い個性的な収集品があります。また、ルノワールやセザンヌなどの印象派絵画や、

日本近代洋画を中心とする寄託作品群も重要です。それでも量的には総計数百点程の規模で、数万点から数十万点の規模をもつ欧米の美術館の収集品の厚みは論外にしても、一般の日本の美術館の中でも、決して豊かとはいえない収集です。

本来、「美術館＝ミュージアム」という制度・機能自体、遡れば遠くギリシャ時代に由来し、フランス革命期の前後に大きく発展したという、きわめて西欧的なものです。そして、我が国には、戦前は東京・京都・奈良の僅か3つの「国立 (皇室) 博物館」しか存在せず、いわゆる美術に特化した「美術館」の役割は、個人コレクションや少数の私立・企業美術館に任されていたにすぎませんでした。他方、長い歴史の中で西欧では、美術品自体がもつ社会とのコミュニケーションの役割がきわめて重視されてきた事実があります。権力も財力も、すべてが視覚化され、造形化されて城や教会、街や家々を飾り、そうしたことがさらに為政者や市民たちの誇りと権威を高めたことは、中世・ルネサンスから絶対王政時代の華麗な作品群を思い出していただければ自明でしょう。ですから、各王室や貴族、富裕な市民はどれだけ重要な収集品を持つかに凌ぎを削ります。ラファエロの作品を何点所有するかでその国や王室の格が決まったのです。そしてその後フランスを中心に各国で整備された近代的美術館も、市民レベルでその方向性を引き継ぎ、現在見られるような多彩な所蔵品を持つ美術館が各地に登場していった訳です。